(5) 令和７年度　学校評価報告書（実施結果）

	視点	４年間の目標 （令和６年度策定）	１年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 （３月 23 日実施）	総合評価（３月 27 日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	① 社会で求められる基礎・基本的な学力や技能を定着させ、それらを活用できる能力を養うためにきめ細かな学習指導・個別支援の充実を図る。 ② 本校の育てたい生徒像の実現に向けた特色ある教育課程を編成する。	① 生徒の特性や学習到達度に対応した学習活動の充実を図り、生徒の主体的な学びを充実させ、ICT機器を活用した授業改善を引き続き推進する。 ② 育てたい生徒像を実現するために教育課程を展開し、教科横断的な学びを意識したブラッシュアップを図る。	① 学習内容のまとまりごとの振り返りを徹底し、基礎学力の定着状況を把握し、主体的な学習活動へ反映する。ICT 機器を積極的に利活用し、学習内容の理解を深める。 ② 組織的な授業改善が図れるよう、校内授業研修会等を引き続き実施する。	① 生徒による授業評価の「授業の中で身についたことや、できるようになったことを実感することができた」の数値が 3.6 以上か。 ② 授業の改善・工夫に ICT 機器を効果的に利活用することができたか。 ② 組織的な授業改善が図れるよう、校内授業研修会等を引き続き実施できたか。	① 生徒による授業評価の「授業の中で身についたことや、できるようになったことを実感することができた」の数値が 3.55 であったが昨年の 3.51 を上回ることができた。 ① 生徒の特性を踏まえた個別最適な学習の手立てを工夫し、日本語を母語としない生徒の学習に一定の成果を得た。 ② 各教科でタブレット端末や電子黒板を効果的に活用して、生徒の学習意欲の向上を図った。 ② １学期、２学期に授業見学週間を設定し、各教科で授業改善の取組みを行った。	① 「授業の中で身についたことや、できるように実感することができた」の数値 3.6 を目指し、ICT 及び電子黒板の利活用や教材の工夫を進める。 ① 生徒の特性を踏まえた学習活動の工夫・改善の一層の充実を図る。 ② 引き続きICT及び電子黒板の活用方法について他校の事例等も参考にするなど創意工夫に努める。 ② 授業見学週間を通して改善点を明確にし、生徒が達成感を実感できる授業に向けて組織的な授業改善を進める。	・「身につく」「できるようになる」は「理解する」等の先にある高い目標なので、3.55 という値は十分に取組の成果が表れたものと思う。 ・日本語を母語としない生徒への対応など、授業運営に多くの工夫がなされている。 ・現代社会における多様性への対応は不可欠であり、特性のある生徒への個別最適な学習の手立てを工夫し、一定の成果が得られたことを高く評価する。	生徒による授業評価の「授業の中で身についたことや、できるようになったことを実感することができた」の数値が 3.55 で昨年度の値を上回ることができた。 学習が苦手な生徒や母語を日本語としない生徒など、多様な生徒に対して生徒の特性を踏まえた個別最適な学びを展開することができた。	生徒が授業の中で身についたことや、できるようになったことを実感することができるように、引き続き ICT の活用や授業見学・研修を通して授業改善を図り、生徒の主体的な学習活動を支援・推進する。
2	（幼児・児童・） 生徒指導・支援	① 基本的生活習慣を確立させ、社会生活で求められる規範意識や判断力を身につけさせ、他者と協働できる態度を育てる。 ② 生徒一人ひとりが得意分野や強味を活かせるよう、自己肯定感の高揚に繋がる支援体制の充実を図る。	① 生徒の生活習慣を把握し、健康管理や食育等の多角的な視点からも生徒支援を行い、規則正しい生活習慣を確立する。 ② 生徒一人ひとりが積極的に取り組める学校行事等を教員間の意識共有・統一を図りながら企画、立案する。	① 生徒支援を充実させるために、かながわサポートドックの情報・評価を積極的に活用するとともに、関係機関とも連携して、相談・指導の充実を図る。 ② 特別活動や各種学校行事等において、生徒が主体的に活動できるよう、職員と生徒の連携を密にする。	① かながわサポートドックの評価を SC、SSW とも共有しながら、適切な生徒支援ができたか。 ② 行事ごとに生徒アンケート等を実施し、生徒が主体的に取り組みながら達成感を得られる企画とすることができたか。	① 生徒理解と適切な生徒支援の充実のために、校内生徒情報交換会を設定し、全職員で生徒の現状や課題を共有するとともに、かながわサポートドックの情報・評価を積極的に活用することができた。 ② 特別活動や学校行事等の場面において、生徒会役員生徒が主体となって企画・運営をすることができた。	① サポートドックを活用し、プッシュ型面談から、実際の支援に繋げることができた。引き続き生徒の支援を継続する。 ① SC,SSW との連携を深め、適時的確な対応に取り組んでいく。 ② 今後も生徒会活動を始めとした生徒主体の活動の場面を積極的に設定し、生徒による自主的な学校行事を実施する。	・４年間の目標にある「自己肯定感の高揚に繋がる支援体制の充実」はとても重要なことである。SC や SSW との連携に留まらず、高大連携活動も活用して欲しい。 ・生徒理解と適切な生徒支援の充実のために、生徒情報交換会を設定して情報を共有することは大切であり、今後も継続して欲しい。 ・定時制という環境下であっても、引き続き、生徒主体の活動の場を設けて企画・運営できる環境を維持して欲しい。	SC や SSW と連携して悩みや特性を把握し教育活動に生かすことができた。 文化祭や体育祭等の学校行事では、生徒同士で話し合い、アイデアを出しあって主体的に企画・運営をすることができた。	生徒指導・支援においては、引き続き SC・SSW・教職員・保護者との連携を図り、遅滞なく支援を進めていく。 生徒会活動では、生徒会役員を中心に、自ら企画・運営できるように引き続き支援する。

	視点	４年間の目標 （令和６年度策定）	１年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 （３月 23 日実施）	総合評価（３月 27 日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
3	進路指導・支援	生徒一人ひとりの進路希望の実現に向け、４年間を見通し、学年間での連携を図りながら、段階的かつ組織的な進路指導・支援体制を構築する。	① ３年間または４年間を見据えて「進路設計」「進学」「就職」について認識できるようなキャリア教育の指導方法を確立し、一人ひとりに寄り添った指導を行う。 ② 地域との関わりの中で、進路の意識を高め、進路実現に向けた取組を推進する。	① 学年ごとに目的を明確にした進路ガイダンスを実施し、情報提供を行うとともに、計画的かつ段階的な進路指導体制を整備する。 ②在学中の就労経験やインターンシップ、総合的な探究の時間を活用しながら職業観や勤労観を養う。	① 進路行事後のアンケート結果及びキャリアパスポート等から、生徒の充実感や進路意識の向上を図ることができたか。 ② インターンシップや総合的な探究の時間の成果として、進路未決定の卒業生をなくす（減らす）ことができたか。	① 進学希望者については個別学習指導、就職希望者については面接指導等を早期から行って、就職希望者３名、進学希望者１名が希望する進路を実現することができた。（進路実現率 100%） ② インターンシップに参加することで、早期から明確な進路目標を設定することができた。また、総合的な探究の時間で様々な職業について調べ、発表する活動を通してキャリア形成を図ることができた。	① ３年間または４年間を見据えながら各学年において段階的に「進路設計」（進学、就職）を進め、生徒の進路実現を図る。 ② 今後も総合的な探究の時間や地域連携等の活動を通して、将来を見据えた進路実現を図り、地域に貢献する人材を育てる。	・インターンシップや総合的な探究の時間を通じて進路選択を支援していることがよく伝わってくる。大学にも遅い時間帯の授業があるので、体験授業で活用してもらいたい。 ・他の定時制高校において進学希望者に対するガイダンス等を実施しているケースがある。必要に応じて高大接続の機会を設定して欲しい。	生徒が希望する進路実現に一定の成果を得たと考えている。 地域との関わりについては、従前の関係にとどまらずに、新たな活動場面を開拓し、生徒自らが主体的に活動できるよう、その方策を追求していく。	３年間または４年間を見据えた「進路設計」を導き、「進学」、「就職」を意識した学校生活をおくることができるようなキャリア教育の指導方法を確立し、計画的かつ段階的な進路指導体制を整備する。 さがみはら若者サポートステーション、同窓生や地元企業等との連携を強化していくことで、地域に貢献する人材を育成する。
4	地域等との協働	① 地域の中の学校として、地域との関わりやつながりを取り入れた教育活動を充実させ、学校と地域の活性化を図る。 ② 学校からの情報発信を積極的に広報し、家庭や地域社会との連携や交流を深め、地域に根差した学校づくりを推進する。	① 引き続き、地元自治会、地元関係機関との連携や交流を積極的に進め、主体的に学びに向かう姿勢を育む。 ② 家庭や地域からの理解を深めるため、学校ホームページ等により効果的な情報発信を行う。	① 地域行事へのボランティア参加や自治会との交流を積極的に図る。 ② 学校ホームページや学校説明会等で、本校定時制の特色や生徒の活動の様子が伝わる広報活動を積極的に行う。	① 卒業時に実施する特色アンケートにおいて活動に対する肯定的回答が８割に達しているか。 ② 学校ホームページや学校説明会を通して、本校定時制の特色や魅力について情報を更新しながら本校の教育活動を広報できたか。	① 卒業時における特色アンケートの回答において、生徒及び保護者から本校の教育活動については９割方の満足度を得られた。 ② 学校HPや中学校訪問、学校説明会を通して情報を更新しながら夜間定時制の教育活動を広報できた。特に、授業公開などを通じて、中学生や保護者に対して本校の特色を広報することができた。	① 引き続き地域の小学校や老人ホーム、地域支援のNPO法人との交流活動を深め、生徒が主体的に地域交流に参画するよう促進していく。 ② 定時制についてより多くの人に知ってもらえるよう、中学校訪問や授業公開の機会を設け定時制の魅力を発信していく。	・生徒及び保護者の学校満足度が９割を超えているのは、充実した高校生活の表れである。定時制課程は多くない分、自治会との交流やHP等における広報が重要であり、今後も重視していって欲しい。 ・入学者の確保に向けて、生徒及び保護者の学校に対する満足度の高さを広く広報して欲しい。	学校の広報活動の一環である職員の中学校訪問及び授業公開を通して、夜間定時制の特色や意義について効果的に広報することができた。 今後も HP の活用や学校説明会などを通して、定時制の魅力を発信していく。	定時制課程が中学校不登校経験者等の学びの場としても有用であることを踏まえて、中学生やその保護者の他に、中学校の教職員に対して、理解を深めてもらう広報を工夫していく。 地域との新たな交流活動を模索し、その実現について追求する。
5	学校管理 学校運営	① 生徒への支援等の時間を確保するために、組織的な学校運営と校務の効率化を図る。 ② 防災意識や危機管理能力を高め、生徒の安全安心な学校生活を確保する。	① 校務における ICT 機器の積極的な利活用や業務の見直し等により、引き続き効果的な業務の効率化を推進する。 ② 夜間定時制として地域の実態に則した、実践的な防災訓練の形態を検討する。	① ICT 機器の利活用を一層推進し、教職員間の業務連絡や各種会議を円滑に行う。 ② 防災マニュアルや訓練の内容等について、適切に実施できるよう見直し、検討する。	① オンライン環境や業務の整理など、働き方改革をさらに進め、生徒と向き合う時間を十分に確保できたか。 ② 生徒の在校が夜間であることを踏まえ、避難訓練の意義を理解し、訓練を実施できたか。	① 校務における ICT 機器や Teams の積極的な利活用、効率的な会議の運営により、教職員間の情報共有を進め、業務の効率化と標準化を図ることができた。 ② 夜間の避難訓練や DIG 訓練の教育活動を通して生徒の災害・防災意識を高めることができた。	① 引き続き、校務におけるICT機器やTeamsの積極的な利活用及び各種業務の見直しにより、教職員間の情報共有を進め、業務の効率化を図る。 ② 今後は、更に防災意識を高めるために、関係機関との連携・協力を得ながら防災訓練の内容等について改善を図っていく。	・業務のスリム化は重要である。ICT 活用等の推進と同時に、逆にそれが手間とならないような仕組み作りも重要であると思う。 ・DIG 訓練や夜間の避難訓練の実施は今後も維持・発展させていって欲しい。	Teams 等の ICT 利活用により、教職員間の情報共有が進み、業務の大幅な効率化につながった。 防災訓練の実施については、訓練時間が夜間定時制であることを踏まえ、実施方法を工夫し、実践的な訓練へ発展させていく。	今後も ICT を利活用し、効率的に業務を進め働き方改革を推進する。 防災訓練の実施については、防災マニュアルの見直しと改善を行い、災害時の行動について生徒だけではなく職員の行動も含めた訓練を維持・発展させていく。